親鸞における仏身仏土觀

須藤了深

親鸞は、主著である『顯淨土真實教行証文類』の第五「真仏土文類」において、阿弥陀如来の仏身と仏土を説いている。それは、光明として象徴された、永遠にして真實なるものであるという。又、本願（阿弥陀如来の誓願）が成就（完成）して成り立っているものであるという。このように「真仏土」として示される阿弥陀如来がいかなる意義をもつのかということ、二つの視点をもってみたい。一つには、真仏土が本願酬報の報身報土であるということは一体どういうことか。二つには、それが光明として象徴されているということはどう理解すべきか。

先ず、「真仏土文類」の冒頭には、「謹テ真仏土ヲ按レハ、仏ハコレ不可思議光如来ナリ、土ハマタコレ無量光明土ナリ。然レハスナハチ大悲ノ誓願ニ酬報スルカ故ニ真ノ報仏土ト曰フナリ。ステニシテ願イマス、スナハチ光明壽命ノ願コレナリ。」（原漢文）と示されている。ここにいう「酬報」とはどのような意味であるのか。「報」とは、普通、仏教で言

われるときは、善惡の業を感じて果を得るということ、有漏の異熟因が異熟果を生じるといふ意味である。有漏に対する無漏、つまり、清淨なる業は、そのような報としての因果を受けない。報ということが、有漏の因果を成り立たしめるのであれば、報身といわれ報土といわれるものは、「有漏のものであるということになる。「大悲ノ誓願ニ酬報スルカ故ニ真ノ報仏土ト曰フナリ」というときの報が、この従來の仏教で言う意味であるのか、あるいはそこには、別の意味が見い出されているのか。これに関して言えば、別の意味が見い出されているといわなければならない。それを親鸞は、善導の『觀經流』の「玄義分」によつて、報とは、『無量壽經』に説かれる四十八願とその成就であるとしてゐる。特に、一一ノ願ニ言ハク、若シ我仏ヲ得ムニ、十方ノ衆生我名号ヲ稱シテ我國ニ生ント願セム、下十念ニ至ルマテ、若シ生レスハ正覺ヲ取ラシト」（原漢文）と示されており、いわゆる念仏往生の願としての第十八願とその成就をもつて、報の根本的

意味であることを言わんとしている。この願（法蔵菩薩の願行）は、有漏の業であるはずはなく、無漏の業であり、別の言い方ですれば、梵行である。四十八願とその成就は、無漏の業の因果を示すものであるということになる。この報（酬報）の意味として与えているということになる。またさらに、曇鸞の『浄土論註』の「性功德」の文を出して、法蔵菩薩とは無漏の法性であり、その性起において阿弥陀如来の浄土が成立しているということを示し、ここにも、四十八願とその成就が、異熟因から異熟果が生ずるという因果ではないことを明瞭にしている。つまり、報ということが、無漏の業における因果等流の事実として解釈されなければならないわけである。ゆえに、阿弥陀如来としての真仏土が、本願酬報の報身報土であるということは、清浄眞実なる業によって得られた果報仏、果報仏土としてあるのが真仏土であるということである、果報仏は報身仏であるということは、従来いわれていることであるが、その意味は、そこに具体的な人が得られている。ということである。そうすると、法蔵菩薩とは、まさに本願において、因果等流して、無漏清浄の身を得て、報身如来となっているものとして見出されているということになる。それが阿弥陀如来の仏身（あるいは仏土）であるということである。

さて次に、この阿弥陀如来は、光明と寿命において無量で

親鸞における仏身仏土観（須藤）

あると象徴され、とくに光明の無量ということが、『無量寿経』には十二光として説かれている。「真仏土文類」には、この十二光の解釈として、憬興と曇鸞の文を出しているが、さらに、『讚阿弥陀仏偈和讃』と『弥陀如来名号徳』に親鸞は十二光を解釈している。また、これに関して、法然の解釈も存する。

十二光とは、無量光・無辺光・無碍光・無对光・炎王光・清浄光・歡喜光・智慧光・不断光・難思光・無称光・超日光の十二である。この中で親鸞が重視したのは、無碍光である。世親の『浄土論』の表白において示された「尽十方無碍光如来」の無碍光であるし、十二光の中心は無碍光であるという見解は処々にみられる。この無碍光の意味を、『弥陀如来名号徳』でみると、この光は、一切の煩惱悪業の衆生を照らし、光は十方億土の三千大千世界を貫通して、衆生の娑婆世界にとどく、と解釈されている。次に、この『弥陀如来名号徳』の無称光の解釈に、「次に無称光ともうすは、これもこの不可思議光仏の功德は説きつくしがたしと积尊はのたまえり。ことばも及ばずとなり。ゆえに無称光という。『讚阿弥陀仏偈』には、難思光と無称光を合して、南無不可思議光とのたまえり。」とある。この無称光の解釈を、『讚阿弥陀仏偈和讃』でそれに施された左訓によってみれば、阿弥陀如来は神光であって説きあらわすことができない、言葉も及ばな

い、そのように光が無限であるから、阿弥陀如来は無碍光仏として存在するのだ、と示されている。阿弥陀如来の十二光としての意義は、無碍光、そしてさらに、不可思議光という二つを中心に解釈されるべきものである。無碍光・不可思議光としての阿弥陀如来とは、人間は、煩惱悪業になやまされ、すべて分別とはからいをもが、そのような衆生として人間に光を向けはなち、それがかたちなき絶対の光として、人間をこえてあるのだ、ということがその本質である。

「真仏土文類」の冒頭の部分に、「仏ハコレ不可思議光如来ナリ」と示されているのは、このような十二光としての阿弥陀如来の意義を示そうとした理由によるものである。煩惱悪業になやまされ、分別・はからいをもつ相対有限なる衆生。それら衆生にこそ光を向けはなつという絶対無限なる阿弥陀如来。この両者の関係が、光明として象徴される阿弥陀如来の意義の背景に暗示されているといえよう。衆生は、阿弥陀如来の光明に照らされているという事実において有限であり、阿弥陀如来は、衆生をわけへだてなく照らすというはたらきにおいて無限である。この有限と無限、相対と絶対という関係を覚知したところに阿弥陀如来が見い出されるのである。

それでは、この光明としての阿弥陀如来が、たらくとは、一体どういうことか。それは、「心光」として示されるよう

に、精神的かつ内面的事実である。心光は、身光あるいは色光に対するものであり、智慧である。衆生が光明としての阿弥陀仏に照らされるといふことは、智慧を得る、ということなのである。そのことを親鸞は明らかに示そうとしているのである。

- 1 『親鸞聖人全集』（教行信証2）二二七頁
（以下「親全」と略す）
- 2 『親全』（同右）二六七～二六八頁
- 3 『親全』（同右）二五〇～二五一頁
- 4 『親全』（同右）二六三頁、及び二五四～二五六頁
- 5 『親全』（和讃篇）八頁～十四頁
- 6 『親全』（和文篇）二二五頁～二二三頁
- 7 『西方指南抄』（上本）に、「法然上人御説法事——三部経の事——」として集録されている。『親全』（輯録篇）三四～三八頁
- 8 例えば、「かさまの念仏者のうたがひとわれたる事」という親鸞の書簡、『親全』（書簡篇）四～五頁。あるいは、「唯信坊にあてた返事」として残されている消息（略本）、『親全』（同上）一五四～一五五頁などがある。
- 9 『親全』（和文篇）二二六～二二七頁
- 10 『親全』（同右）二二二～二三二頁
- 11 『親全』（和讃篇）一三頁
- 12 『尊号真像銘文』の「彼仏心光常照是人」の文を解釈したところ、『親全』（和文篇）五七頁。あるいは、「信文類」の後半の『涅槃経』の阿闍世の回心のところ、『親全』（教行信証1）一六六頁。

△キーワード▽ 酬報、心光

（大谷大学大学院）